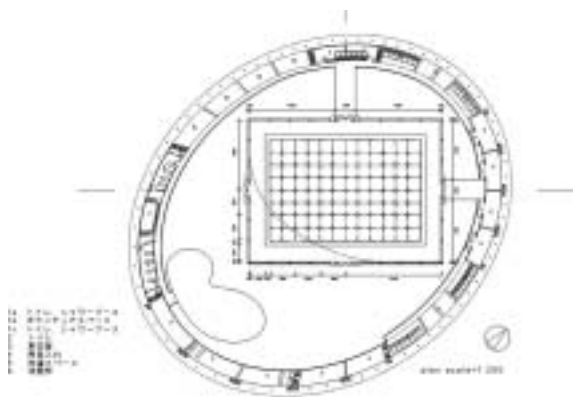




日本大学 生産工学部 建築工学科

伊藤茉莉子

最近、避けられない自然災害が多発している。被災時には好むと好まざるとに関わらず、学校の体育館は臨時の居住空間となることが多い。しかしTVのニュースで毎日のように映し出される体育館での避難生活は、最低限の生活さえ確保されていないのが現状である。そこで、居住空間となることを考えながら、同時に通常時においても便利で快適なアリーナが実現可能なのではなかったか、という仮説をたててそれを検証してみようと考えた。この提案は決して、奇抜なものでも新しいものでもないが、アリーナというどこにもある空間に居住空間という全く異なる視点を与えることによって機能やデザインに新しい可能性を見出せると感じた。



## 講 評

大きく張り出された白黒写真、大勢の家族が車座に座り布団や紙袋がいっぱいに散らばっている。子供が、母親が、老人が疲れきった表情で……。

昨年の新潟中越地震での避難所の風景から始まるこの作品は、写真そのもののインパクトもさることながら、その下にさりげなく置かれた単純で美しい模型との対比的演出によって、見る人を捉えるさわやかな印象を放っている。「奇抜なものでも新しいものでもないが、まったく異なる視点を与えることによって、機能やデザインに新しい可能性を見出せる」そこには生活者として建築を見つめる作者の優しいまなざしが感じられ、社会と建築との現実的関わりを改めて考えさせられる。生活スペースと通路を分ける昇降床や、照明昇降を利用した天井システム、簡易間仕切り等、細やかな検討と単純で具体的システムは、雑魚寝・我慢型の避難所のイメージを生活の場として一新させる可能性を提案すると同時に、緑に埋められた楕円形の付属室と外周を開放され昇り庭に囲まれたアリーナがシンプルで美しい建築空間として表現されている。

[ 審査員 柳田 富士雄 ]